2022 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

岸 美咲

１．事業実施の目的

今回の調査は博士論文執筆のための予備調査として実施した。具体的には、中部ジャワの影絵人形芝居ワヤン・クリッにおける女性のダラン(人形遣い)の調査である。今回は、三名の女性ダランを対象に、彼女らのこれまでの人生における主要な出来事や、それぞれが影響を受けた人物などについてインタビュー調査を行うことを第一の目的とした。また、女性ダランによって実際に行われている上演を観察したり、報告者自身もその演奏に参加したりすると同時に、録画をして記録に残すことで、女性ダランの活動の最新の現状を把握することを第二の目的とした。

２．実施場所

インドネシア中部ジャワ州スラカルタ市、ボヨラリ県、ジョクジャカルタ特別州

３．実施期日

2022 年 11 月 28 日（月）～　20222 年 12 月 27 日（月）

４．成果報告

●事業の概要

報告者はこれまでインドネシア中部ジャワの伝統音楽ガムランとそれを伴奏音楽として用いる影絵芝居ワヤン・クリッ(以下ワヤン)について、中部ジャワのスラカルタ市を拠点に研究を行ってきた。ワヤンの上演はダランを中心に進行する。ダランは、人形操作に加え、語りや上演で使用される音楽の演出の考案など、複数の役割を同時に担っている。報告者は、特にこのダランに注目して研究を行っている。先行研究では、ダランは男性であることが基本的な前提とされており、女性のダランは古くから存在してきたものの、女性ダランの活動や上演の詳細は先行研究ではあまり取り上げられてこなかった。しかし、現在スラカルタ周辺では、女性ダランの上演の機会が増えており、ダランについて議論するためには、女性のダランの活動も含めて考察することが不可欠である。報告者は、博士論文において、女性ダランの活動を取り上げ、彼女らがどのような人生を送り、どのような活動をしてきたのか、さらに、彼女らがいかにして他の芸術家と協働しながら上演を行なっているのかについて明らかにする予定である。本研究では、ルミヤティ・アンジャンマス Rumiyati Anjangmas 氏、クニ・アスモロワティ Kenik Asmorowati 氏、エリシャ・オルチャルス・アロッソ Elisha Orcarus Alloso 氏という、世代の異なる三名の女性ダランを取り上げる。今回の調査は彼女らへのインタビューを行うことと、実際の上演の様子を観察し、報告者も演奏に参加しながら録音、録画を行うという、大きく二つの活動に分かれた。調査

は、具体的には以下のとおりである。三名の都合により、調査は申請書とは異なる日程で行うことになった。

まず、インタビューは上記の三名にそれぞれ次のような日程で行った。ルミヤティ氏とは 12 月 9 日から 22 日にかけて、同氏の自宅で 2 時間半程度のインタビューを計 6 回行った。また、全ての日程で、同氏の姪のニア・ラハルジョ氏にアシスタントを依頼した。エリシャ氏には 12 月 13 日にスラカルタ市内でインタビューを行った。当初は 2 時間半程度のインタビューを 3 回行うことを予定していたが、多忙で予定通り時間を取るのが困難であったため、1 時間半のインタビューとなった。クニ氏には 12 月 20 日、12 月 23 日の 2 回、彼女が勤務するインドネシア国立芸術大学スラカルタ校でインタビューを行った。彼女もまた多忙であったため、当初は 2 時間半程度のインタビューを 3 回行うと申請をしていたが、実際には 2 時間のインタビューを 2 回実施した。各氏のインタビューの内容は、次の本事業の実施によって得られた成果の項目で詳述する。

次に、エリシャ氏がダランとして上演を行なう機会と、歌手として上演を行う機会があったので、それらの上演に同行した。その現場では上演を観察したり、報告者自身もその演奏に参加したりすると同時に、録音、録画を行い、記録に残した。エリシャ氏はダランとして活動するほかに、ガムランにおける女性歌手としても活動している。報告者の滞在期間中に彼女はダランとして 2 回上演を行なったほか、女性歌手として 2 回他の男性ダランのワヤンの上演に参加した。まず、彼女がダランとして上演を行ったのは、12 月 7 日、12 月 15 日であった。これらはいずれもジョクジャカルタ特別州内で行われた。また、彼女が歌手として他のダランの上演に出演したのは、12 月 16 日、12 月 21 日であった。前者は男性ダランのプルボ・アスモロ Purbo Asmoro 氏の上演で、ジョクジャカルタ特別州内のガジャマダ Gajah Mada 大学で行われた。12 月 21 日はウォノギリ Wonogiri 県の個人宅で行われた上演で、報告者はこの上演を行った男性ダランのチャヒヨ・クンタディ Cahyo Kuntadi 氏に同行させていただいた。

上記の調査の合間に、国立芸術大学スラカルタ校の図書館でワヤンに関する文献調査も行なった。具体的には、ワヤンの語りにおいて使われる特殊なジャワ語の語彙についての解説書や、90 年代の上演の特徴についてのインドネシア語の研究書や修士論文を探索し、複写を行なった。また、同校の講師の先生が個人で所有している女性ダランに関する雑誌記事も複写させていただいた。

●本事業の実施によって得られた成果

インタビュー調査からは、三名の女性ダランがこれまでどのような人生を歩み、どのような活動を行ってきたのか概要を知ることができた。具体的には、それぞれ以下のような内容である。

1. ルミヤティ氏

親族について聞き取りをおこない、家系図を作成して他の芸術家との親族関係を確認した。また、ダランの実技習得や芸術家としてのキャリアを明らかにした。彼女は、1946 年に生まれ、幼少期にはダランであった両親の上演を見学して人形操作や語りを学んだ。さらにキ・ゴンド・

マクタル Ki Gondo Maktal やキ・ナルト・サブド Ki Narto Sabdho らのダランから大きな影響を受けた。1970 年には国営ラジオ局の専属歌手となり、2012 年までジャカルタを基盤として歌手およびダランとして活動した。1985 年には、つくば万博にも来日している。人形を使用せず語りで上演を進める、独自のワヤンを創出した。

2. エリシャ氏

ダランや歌の技術習得のプロセスや彼女に影響を及ぼした人物について聞き取りを行った。彼女は 1993 年にジョクジャカルタで生まれたが、両親はジャワ島ではなくスラウェシ島の出身である。彼女は 2011 年に演劇を研究するために国立芸術大学ジョクジャカルタ校のダラン専攻科に入学し、そこで初めてダランと歌の実技を学んだ。ジョクジャカルタを拠点に活動していたダランのキ・セノ・ヌグロホ Ki Seno Nugroho を卒業論文の研究で取材したことをきっかけに、彼の上演に歌手として出演するようになり、人気を得るようになった。現在彼女にはファンクラブがあるほどである。彼女の上演スタイルは、キ・セノの影響を強く受けている。キ・セノは 2020 年に逝去したが、現在もキ・セノの楽団を基盤に彼女は活動している。彼女は芸術を研究する博士後期課程の学生でもあり、実践だけでなく研究活動も大切にしている。

3. クニ氏

2000 年代初期の芸術大学の様子や、クニ氏が行った女性ダランをプロモーションする活動、彼女のキャリアや宗教観について聞き取りを行った。クニ氏は 1999 年に国立芸術大学スラカルタ校ダラン専攻科に入学したが、当時はダラン専攻科の女子学生がまだ少なかった。修士課程修了後、彼女は 2014 年にダラン専攻科の女性初の講師に登用され、さらに 2021 年には女性初の学科長に就任した。彼女はその過程で女性も大学で学びやすい環境を整えることに尽力してきたほか、女性のダランのコミュニティを作り、上演の機会を増やす活動を精力的に行ってきた。さらには、ワヤンがイスラム教徒だけの芸術であると誤解を受けないようにするため、彼女はイスラム教徒でありながら、あえて女性がつけるベールを着用しないという選択をしている。

さらに、三者に共通して上演の台本を作成している人物がいることが明らかになった。ダランは本来自身が上演における語りや音楽上の演出をすべて考えているとされてきたが、この事例から、それは徐々に変化していると考えられる。加えて、それぞれに非常に強く影響を受けた男性ダランがいることが分かり、また彼女らに影響を与えた人物が三名の間で共通している場合もあった。よって、上演はダランの考えのみで成立しているのではなく、他の芸術家の影響を受けながら成立していると見ることができる。今後は、この三名だけでなく、ダランをはじめとする芸術家同士のネットワークにも注目する必要があると考えられる。

これらの成果について、比較文化学基礎演習 II におけるリサーチプロポーザルで発表を行った。特に「芸術家同士のネットワーク」という視点は今回この調査に行くことで得られた新たな視点である。今回得た情報や知見をもとに、さらに研究計画を見直し、来年度に予定している長期の現地調査にいかしたいと考えている。

●本事業について

この事業により経済的な負担が軽くなった。最近は航空券の価格が高騰する傾向にあり、自費では渡航すること自体が難しい状況であったが、この事業に採択していただけたことで、現地に行くことが可能になり、対面で多くの方々とお話しすることができた。さらに、インタビューや印刷してきた資料からも数多くの有意義な情報を得ることができたため、リサーチプロポーザルや今後の博士論文執筆の準備を大きく進めることにもつながった。ひじょうに貴重な機会を得ることができたことに心から感謝している。今後もこの事業をぜひ継続していただきたいと考えている。

写真 1: ルミヤティ氏とのインタビューの様子（2022 年 12 月 9 日、ルミヤティ氏の自宅にて、ニア・ラハルジョ氏撮影）

写真 2:エリシャ氏の上演の様子(2022 年 12 月 7 日、ミニマルタニアートセンターにて、報告者撮影。)

写真 3:チャヒヨ・クンタディ氏(写真中央)の上演で歌うエリシャ氏(2022 年 12 月 21 日、ウォノギリ県にて、報告者撮影。)

写真 4: クニ氏とのインタビューの様子(2022 年 12 月 20 日、国立芸術大学スラカルタ校にて、大学のスタッフが撮影。)